

十勝が描かれた文学

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展、今、そして未来へ

用語

さくいん



(上) 音更神社は「火山灰地」の素材地であり、境内にそれを示す標識が建っている。



(右) 音更神社の位置。音更町元町。

十勝の大地と向かいあう人々のすがたは、いくつものドラマをつくり出し、それは小説などの文学となりました。十勝の作家がつくり出したものもあれば、十勝以外の作家が十勝を描いたものもあります。

あるいは、十勝を訪れた作家たちが、それぞれの視点から十勝について書き残してもいます。

久保栄の戯曲「火山灰地」（新宿書房）などのように、必ずしも川が描かれるとは限りませんが、題材とされた十勝のすがたの背景には、美しく、おそろしい自然としての川があり、また、食べ物や仕事、交通など人間の生活と深くかかわりを持つ存在としての川がありました。

十勝について描かれた文学の一部を紹介します。（子ども向けに書かれたものではありません）（敬称略）



「人間の土地(全8巻)」と「上西晴次短編全集ポロヌイ峠」。

十勝出身の小説家の作品

中札内村の開拓者を父母に持ち、自分も農民であった吉田十四雄の「人間の土地(全8巻)」（農山漁村文化協会）では、移住から始まる十勝農民のすがたが描かれています。おりにふれ、札内川やヌップクノップク川、戸蔦別川などの川が登場します。

また、上西晴治（浦幌町出身）の小説は、開拓が進む中で近代化からはじき出されたアイヌ民族のすがたを、きびしく、きたなくもある現実を見すえながら描いています。「上西晴治短編全集 ポロヌイ峠」（風濤社）の作品の多くには、十勝川とその周りに生きる人々のすがたが描かれています。

十勝が登場する小説

吉屋信子は、大正8年（1919）、兄の招きで池田町にやってきて、およそ1年滞在しました。そしてこの場所で、農場の小作人たちの生活などをもとにした「地の果まで」（『吉屋信子全集2』〔朝日新聞社〕に収録）を書き上げ、大阪朝日新聞の懸賞小説に応募、当選を果たしました。

これによって、信子は本格的な小説家への道を歩み始めました。池田町の清見ヶ丘公園には文学碑が建てられています。

梶山季之の「赤いダイヤ」（パンローリング）、瀬戸内晴美の「妻たち」（新潮社）などには十勝川温泉が登場し、十勝川の描写も見られます。

米村晃太郎の「サイロ物語」（作品社）には、十勝川の古いアイヌ語名である「シアンルル」からイメージしたと思われる、「シアンルル河」が登場します。



(上) 吉屋信子文学碑。池田町清見ヶ丘公園にある。



(右) 吉屋信子文学碑の位置。池田町字清見ヶ丘。

1 戯曲（ぎきょく）：劇の上演のために書かれた、せりふ、装置、演出上の注意などを記したもの。または、その形で書かれた文学作品。

2 小作人（こさくにん）：小作人は、地主から土地を借りて耕し、土地に割り当てられた小作料を払う。（ p166 ）

十勝を訪れた作家たち

明治から昭和にかけての小説家・詩人である佐藤春夫は、明治41年（1908）、中学生の時、幕別町におよそ2ヶ月滞在しています。また、昭和38年（1963）には、豊頃町の弟宅に泊っています。これらのことは、「わが北海道」（新潮社）に記されています。

長節湖畔（豊頃町）には、佐藤春夫の歌碑が建てられています。

小説家徳富蘆花は、明治43年（1910）、関寛（関寛齋）に招かれ陸別にやってきました。その時のことが「みみずのたはこと」（新橋堂・のちに岩波文庫）に記されています。斗満川についての記述も見られます。



(上)長節湖畔(豊頃町)にある佐藤春夫の歌碑。後ろの水面が長節湖。



(右)佐藤春夫の歌碑の位置。豊頃町長節。



「鈴木銃太郎日記」と「池田町開拓夜話」。

記録も文学となる

明治16年（1883）に帯広に入植した晩成社の幹部たちは、それぞれが日記などを残し、貴重な記録となっています。

例えば、「鈴木銃太郎日記」（田所武 編著、柏李庵書房）には、日々の暮らしがスッキリとリズムカルに描かれています（少し読みづらいですが）。

また、同じく田所武の「拓聖依田勉三傳」（拓聖依田勉三刊行会）には、晩成社の人々の手記や日記がのせられています。

昭和11年（1936）、野塚原野（広尾町）に入植した坂本直行は、登山家でも画家でもありました。彼は、開拓の記録をした「開墾の記」（長崎書店）を書いています。

その他、この本でも引用している「池田町開拓夜話」（池田町史編纂委員会）や「豊頃よもやま話作品集 あかだも」（豊頃町豊寿大学文学科）、あるいは「ふるさとの語り部」（帯広百年記念館）など、古老の話などをまとめた記録もあります。

俳句や短歌も

戦後、豊頃に入植した俳人、細谷源二は、十勝の農村と生活を描いた句集「砂金帯」（北方俳句人社）を出しています。

時田則雄は帯広市別府町で農業を営みながら、十勝の風土に根づいた短歌を詠み続け、歌集も出しています。

十勝を代表する歌人である中城ふみ子の短歌には、川を詠った作品はないようですが、ぜひその歌にふれてみたい作家の一人です。



(上)時田則雄と中城ふみ子の歌集。



帯広市図書館2階にある「中城ふみ子資料室」。さまざまな角度からの展示がある。

3 関寛・関寛齋（せきゆたか・せきかんさい：1930-1912）：今の千葉県生まれ、のちに徳島の医師となる。明治35年（1902）72歳の時、財産を整理して開拓資金とし、陸別町斗満（とまむ）に入地した。寛齋は作家としての名前。

4 記録も文学（きろくもぶんがく）：幕末の探検家、松浦武四郎（まつうらたけしろう：p142）の記録（『戊午東西蝦夷山川地理取調日誌』（秋葉実 解説、北海道出版企画センター）など）にはあたたかみやユーモアがあり、すぐれたエッセーともなっている。